

わが国における「世界史」理論の歴史（3）

——遠山茂樹・太田秀通の世界史理論——

有 田 嘉 伸*

(平成元年4月5日受理)

A Historical Study on the Theory of "World History" in Japan (3)

Yoshinobu ARITA

(Received April 5, 1989)

1. はじめに

高等学校社会科における科目「世界史」は1948年10月に成立したが、その理念・目標・内容等に明確な学問的背景をもたないままに始められた。そのため、「世界史」の構成について多様な意見が輩出し、「世界史」と銘うった多くの書物が出版されたが、それらの多くは、戦前の西洋史と東洋史を組み合わせたものにすぎなかった。⁽¹⁾ そのなかで、上原専禄は、現在の日本人の問題意識に立って世界史像を自主形成する「課題化的認識」を主張し、その方法を用いて『世界史講座』全8巻（東洋経済新報社・1955～56）や『高校世界史』（実教出版社・1956、のち『日本国民の世界史』、岩波書店・1960として刊行）を出版した。⁽²⁾ 上原専禄の世界史理論は、その後吉田悟郎を中心とする高校世界史教育の現場で継承されていった。⁽³⁾ 一方、歴史学界においては、1949年度歴史学研究大会で「世界史の基本法則」が統一テーマとされたが、それは必ずしも社会科「世界史」の理論を追究しようとしたものではなかった。そして、1950年代のなかば以降、研究の専門分化の著しい進行のなかで、研究と教育の乖離が大きくなり、研究者の側に歴史教育に対する軽視と無理解がみられる一方、歴史教育の側は、研究者が国民の歴史意識の形成に無責任であることに不信感をもった。このような状況のもとで、遠山茂樹が1963年度の歴史学研究大会で行った「東アジア歴史像の検討」、⁽⁴⁾ 及びそれを発展させた1965年度歴史学研究大会での「世界史における地域史の問題点」⁽⁵⁾の発表は、歴史教育と歴史研究の連携を回復する意義をもった。そこで提案された遠山茂樹の世界史理論は、その後太田秀通が論文「思想としての世界史像」⁽⁶⁾で高く評価するとともに、それを修正する時代区分を提唱した。これら遠山・太田の世界史理論は、上原専禄の世界史理論を批判的に摂取しながら出された戦後マルクス主義歴史家に

*長崎大学教育学部社会科教育教室

よる最初の世界史理論であった。本稿は、太田秀通の論にそって戦後の歴史学界の動向をたどるとともに、⁽⁷⁾ 遠山茂樹・太田秀通の世界史理論を検討する。

2. 戦後の歴史学のあゆみと1960年代の新しい問題意識

太田秀通は、戦後の歴史学界は現実から出たさまざまな問題提起をしてきたが、そのときどきの問題提起には方法上の特色と問題意識の基底にある価値観の実際上の特色を伴っていたとし、⁽⁸⁾ そうした問題観を中心に戦後史学史を時期区分している。その問題提起のなかでは、遠山茂樹もいうように、「世界史認識の必要」「世界史的把握の重要」なことが一貫して強調されてきたが、⁽⁹⁾ 各段階とその時代背景、特徴は次のようであった。

第1段階（1940年代）…研究課題として「世界史の基本法則」を掲げた時期

この研究課題は、①戦前・戦中の権力に対抗するレジスタンスの姿勢から継承された問題意識を客観化したものであり、②国粹主義・軍国主義・皇国史観にかわる科学的な歴史学を求めて掲げられたものであったが、この段階の問題意識は次のような特徴をもっていた。⁽¹⁰⁾

- (1) 日本もまた、普遍化的歴史観の上に立つ段階理論を中心とした発展段階論が基本的にあてはまることを論証しようとした。
- (2) 階級理論を中心とする社会構成の精密な分析と理論的認識が進化した反面で、現実的な諸個人の活動を論理のあやつり人形とするような傾向を生んだ。
- (3) 研究者の視野を狭くし、一国史分析の方法で他国との発展の異同を論じるという比較社会史の域を出ることができなかった。
- (4) 基本法則が一系発展の理念型として客観化されたため、世界史は原則として一系の発展段階を経る世界の諸民族史の集積として考えられた。

こうした問題提起と研究方法とは、研究史の上でも、当時の歴史的現実に対しても、積極的な意義をもっていた。すなわち、アジア諸民族の歴史が、西ヨーロッパの歴史とまったく異質のもの、あるいは停滞性を特色とするものといった戦前の一般的見解を打破することが目ざされ、その目的に一定の寄与を果たしたが、アジア社会停滞論の克服とはならず、かえって西ヨーロッパと異質の型の検出となる傾向をもった。⁽¹¹⁾

第2段階（1950年代）…研究課題として「民族の問題」を掲げた時期

この研究課題が掲げられた背景としては、①アジア世界におけるナショナリズムの高揚や独立国の形成、②インドシナ戦争や朝鮮戦争の歴史的認識を、日本人の主体性をもった立場から捉える必要性、③安保反対運動の評価、④アジアにおける帝国主義体制の強化と中国に対する攻撃、などがあったが、直接的には、第1段階の問題提起そのものに対するアンティテーゼとして、歴史研究における人間の回復を旨とするものであった。この段階の問題意識は次のような特徴をもっていた。⁽¹²⁾

- (1) 民族の視点は、一国史的法則の普遍と特殊との弁証法的な関係を具体的・発展的につかもうとする企図であると同時に、一国史を世界史のなかに位置づけ、一国史的発展法則と世界史的発展法則との関連を、それぞれの民族の主体において把握しようとする問題の提起であった。
- (2) 主体性を現実のなかで確立し、研究を主体性確立のために行おうとする発想は、性急な実用主義や、政治主義的な傾向に陥りやすく、研究者集団の分裂を生み出した。

(3) 理論的に位置づけうる精密な方法論を生み出せず、肌の荒い情熱的なアピールに終わることが少なくなかった。

一国史分析を中心とする見地は一系的発展段階論と密接な関連をもっていたが、このような問題観の特徴は「世界史」教科書の内容にも反映した。すなわち、世界史の構成としては、従来の西洋史と東洋史とを併立させたり、組み合わせたりしながら、両者をつなぐのに文化交流をもってするという方法がとられたが、これでは、弱少民族の一貫した民族史のイメージを描き出すことができなかった。また、世界史を、ヨーロッパの先進国の時代区分に従って大きく時代区分するという方法に対して、同時代的並列的方法をもって世界史の諸段階を捉えようとするものもみられた。このようななかで、世界史の構成原理確立の必要性が歴史教育の側から歴史研究に対する要請として出されたことも、次の第3段階の問題提起がなされる背景となった。

第3段階（1960年代）…研究課題として「世界史像の新構成」や「地域史の問題」を掲げた時期

この研究課題が設定された背景には、上記の①歴史教育からの要請、の他に、②中ソ論争が歴史学の方法についての根本的反省を研究者に要請したこと、③「昭和史論争」「『近代化』論」「明治維新論」が学界にもたらした影響、などがあった。この段階の問題意識の特徴は次のようなものであった。⁽¹³⁾

- (1) 方法的には、民族史発展の内因と外因の相関に帰着するはずであるが、学会状況、政治状況、歴史教育からの要請などこの問題意識形成のモメントの多様性のために、明確な方法論を生み出していない。
- (2) 「近代化」論やヨーロッパ中心史観、さらにそれと同じ次元でのアジア中心史観や日本中心史観を克服するための模索であったが、世界史把握の根本問題にまで立ち返らなければならないような問題を含み、世界史構成の原点へのアプローチなしには、自己自身の学説上の位置さえ明確にしえないような性質をもつ。
- (3) 実際には東アジアの地域史をめぐるこの問題意識が表明されているため、歴史的世界というものについての再検討を要求している。
- (4) 世界史を単に民族史の集積と見ず、発展段階や社会構成を異にする諸民族の「構造的複合体」とみなしている。

この段階で出された研究成果のうち、特に重要なのは、遠山茂樹の「構造的複合体」論である。太田秀通はそれを、「世界史の発見」といってよいほどの内容をもつものである⁽¹⁴⁾と評価しながら、しかし遠山の5時代区分はもっと精密に吟味しなければならないと述べ、その修正案を提唱している。次に遠山試論と太田修正案を比較しながら、「構造的複合体」論について検討したい。

3. 遠山茂樹・太田秀通の世界史理論—「構造的複合体」論—

遠山茂樹は、「世界史はいかに構成されるべきか」「世界史の発展法則とは何か」「世界史と一国史の発展法則との関連はどうか」「世界史のなかに民族の歴史を位置づけるとはどうか」という問題について、次のように述べている。

「われわれの求める世界史の構成は、各民族の歴史現象を同時代的に横に切って羅列し、ないしせいぜいその間を交渉史でつなげた、そうした世界史ではない。われわれの求める

世界史法則とは、一国史の発展法則とまったく同一であり、すなわち諸民族の歴史が、先進と後進の差こそあれ、同一の発展の途をたどるものであり、したがって先進国の影響、指導の下に、後進国が先進国のあとを追うことが、世界史の発展であると見る、そうした世界史の発展のつかみ方ではない。われわれの求める世界史は、一定の構造をもつ世界史とその発展法則である。今日アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸民族が独自の価値と運動法則とをもって、固有な位置をしめ固有な役割をはたす、それが世界史の発展法則に連帯する、そうした世界史を考えている。帝国主義国の人民、社会主義国の人民、新興独立国の人民が、それぞれ異なる発展段階にあり、異なる課題の解決に努力しながら、相互に自主、対等の資格において、帝国主義と植民地主義の克服、平和と独立と民主主義の達成という共通課題に向かって連帯することが可能とされ、必然とされている現代世界の歴史的特質を明らかにする、そうした世界史の発展法則を求めているのである。」⁽¹⁵⁾

すなわち、一国史の世界史的把握を行うためには、同時代の世界史総体の構造を明らかにし、その中にその民族の歴史的発展を位置づけることを主張した。そして、同時代の世界史総体について、次のように述べている。「世界史とは、経済発展段階、社会経済構成体を異にする諸民族相互が、有機的関連をもつ構造的複合体である。その世界史の地理的範囲は、その内部構造とともに時代によって異なるのである。」⁽¹⁶⁾と。

ところで、遠山茂樹の世界史理論に影響を与えたのは、次の二つのものであった。一つはソビエト科学アカデミー版『世界史』（邦訳・東京図書・1961～67）である。それは、人類を現在の発展段階に合法的にみちびいてきた全行程の概観を試みた最初の体系的な世界史であり、アジア・アフリカ等の諸民族の役割を正当に評価しようとしていた点に画期的価値をもった。しかし、一方、発展段階を異にする諸民族の歴史の同時代的把握を世界史の構成原理としながら、同時に世界史の法則は、原始共産制・奴隷制・封建制・資本制という一国史の発展法則と同じだとされているのである。そこでは、先進国の発展段階が後進国の歴史発展を規制することが注目されているが、逆に、いわゆる後進国が先進国の歴史を制約する面が軽視されているのである。遠山茂樹は、先進国の発展段階を基本にすえて世界史の時代区分をすることに反対し、巨視的な意味で同時代的方法を取り入れながらも、後進国から先進国への制約をも同時に考慮するような発想をもとにして、「構造的複合体」としての世界史自体の基本的構造変化を指標として、独自の世界史の時代区分を設定した。

いま一つは、上原専禄の地域圏構想である。上原専禄は1950年代の「文明圏」論を發展させ、1964年に発表した「歴史研究の思想と実践」では次のように述べている。すなわち「それぞれの国の中に出ている問題の実際的共通性・具体的相互媒介性、時には逆に具体的な相互反撥性において、現実の一つの歴史的世界を形成しているとみることのできる地域世界というものを見出していき、もろもろの地域世界の複合的構成体として、はじめて「地球的全世界というものをとらえていく」⁽¹⁷⁾という世界史把握の方法である。遠山茂樹も、「世界史の考察には、地域別の把握を不可避とするが、地域設定の基準は何か、現実の外交・政治・経済の相互関係よりする地域設定、文化圏といわれる地域設定、社会構造の類型把握よりする地域設定、それらの基準とその相互の関連、またその時代的变化といった問題が解決されなければならない」⁽¹⁸⁾と述べている。

太田秀通は、遠山理論を支持しながら、その時代区分を修正して6時代区分を提唱した。

それらを比較して示すと、以下の通りである。

遠山茂樹の時代区分	太田秀通の修正による時代区分
<p>①古代帝国の時代</p> <p>○この時代には単一の世界史は構成されておらず、古代奴隷制世界帝国の領域を単位とする複数の歴史的世界が並立している。</p> <p>ア ギリシャ・ローマの世界 イ オリエン特の世界 ウ インドを中心とする世界 エ 中国を中心とする世界</p> <p>○それぞれの世界は、一定の構造をもつ独立した歴史的世界である。</p> <p>○「一定の構造」は、そこに包含される諸民族の社会構造と、その世界の国際的構造とが、きり離しがたい有機的関連をもつてつくられる。</p> <p>②古代世界帝国解体過程の時代</p> <p>○古代世界帝国の解体が進行するにつれて、領域内諸民族の独自の歴史的發展が現れてくる。その独自の発展は、各々の民族の内的条件（経済発展段階、階級対立と階級闘争の発展）とともに、世界帝国からの離脱が、どのような時点で、どのような形で実現したかという国際的条件によっても規定される。</p> <p>○一定の構造をもつ世界史の規制がもっとも弱く、各民族の内部的条件によって、文化・社会の独自の発展が見られ、このことが次の時代の各民族の歴史の特殊的展開を生み出す基礎条件をなす。</p>	<p>①原始社会発展過程の時代</p> <p>○生産し生活する現実的諸個人の人間として確立されてくる過程における感性的実践活動の意義にまでさかのぼり、文明形成以前の時代に、文明に向かって歩みつつあった人間の在り方と肉体的苦を、諸科学の成果の上に立って歴史的に跡づけるために設定（人類史的見地の必要を強調）。</p> <p>○遠山説には欠如。</p> <p>②古代世界帝国形成過程の時代</p> <p>○遠山説の①に該当。</p> <p>③古代世界帝国崩壊過程の時代＝封建国家確立過程の時代</p> <p>○遠山説の②に該当。</p> <p>④絶対主義的植民地帝国形成過程の時代</p> <p>○遠山説では、②から③へのギャップが大きすぎるので、封建社会を含めるものとして、この時代を設定する。</p> <p>○中世ヨーロッパ世界での国家関係には、ローマ教皇の権威の問題や、国民の意志に関係なく諸王家の婚姻関係に基づく領土の継承といったような特殊な問題があり、しかもアラブ・モンゴル・トルコなどの異常な征服が荒れ狂うなかでの国家関係・民族関係を考慮に入れなければならない。</p>

遠山茂樹の時代区分	太田秀通の修正による時代区分
<p>③資本主義の世界市場形成過程の時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○はじめて有機的関連をもった単一の世界史が一応成立する。 ○その世界史は、ヨーロッパ資本主義の世界支配と搾取の構造をもつ。 ○世界資本主義の法則と、前近代的社会経済構成体諸民族の歴史の発展法則との間に激突がみられる。 ○その激突は、時点と地域とによって著しく異なる形態をもつ。それ故に、この時代の世界史の把握には、地域史的考察が有効である。 <p>④帝国主義の時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○帝国主義の世界支配が完成し、帝国主義が世界体制となった時代で、地球大規模での一つの世界史が確立する。 ○どの民族の歴史発展も、世界史の発展法則に包摂されている。 ○地域史的考察は③の時代に比べて有効性を減じるが、帝国主義の世界史的矛盾の結節点・爆発点をなす地域（例えば東アジア）に限り、有効性をもつ。 <p>⑤帝国主義崩壊過程の時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○この時代は第2次世界大戦後に始まる。 ○帝国主義と社会主義の二つの体制の間に激しい流動化がみられ、そのジグザグな発展の動きが独自の要素をなしている。 ○世界史の法則は地域史を媒介とせず、直接一国史の法則に結合し、これを規制する傾向が強く、原則的に一つの世界史としての地域論は成立しない。 ○しかし、社会主義への多様な道、民族の解放独立への多様な道、世界平和達成への多元的な力が可能なため、地域論、民族論も重要な意味をもつ。 ○帝国主義国の人民である日本人にとって、帝国主義的な世界史認識をいかにしたら克服できるかという問題を根底にもっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○先進絶対主義王国による世界的規模での植民地帝国の形成は、封建社会の最後の段階としての絶対主義の帰結であり、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの植民地化・従属化の端緒がここで開かれている。 ○絶対主義的植民地帝国は、植民地争奪戦を経て支配圏を変えながらも解体することなく、かえってヨーロッパ諸国の資本主義化の重要な条件となりつつ、産業資本主義から帝国主義へと継承され拡大された。 <p>⑤帝国主義的世界支配体制形成過程の時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○遠山説の③と④を一つにして、この時代を設定。 <p>⑥帝国主義的世界支配体制崩壊過程の時代＝社会主義世界体制形成過程の時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ○世界平和と民族独立とが両立し、階級支配とその外部への展開である民族支配とがなくなる時代へ向かっている。 ○そのために諸民族が独自の意志と行動とをもってその実現に努力すべき時代である。

太田秀通は、遠山茂樹の時代区分を以上のように修正するとともに、いくつかの問題点を指摘している。一つは、世界史を構造的複合体と考える場合、この構造的複合体の構造をきめ、この構造を変えていくものは、この構造自体に内在する合法則性的発展ではなく、この複合体を構成する歴史的主体としての諸民族・諸国家の内的矛盾の変化であるということである。そのため、研究の主要目標は、現実に存在する民族や国家の内的構造とその発展であり、構造的複合体としての歴史的な世界は、これを構成する歴史的諸主体の内的発展をどう制約するか、という問題として展開していかなければならない。すなわち、一国史研究の具体化のためにこそこの問題提起が必要なのであり、「世界史の基本法則」の再検討は、基本法則の廃棄であってはならない⁽¹⁹⁾と。もう一つは、こうした世界史の理論が世界史学説のなかでしめる位置づけが明らかにされていないことである⁽²⁰⁾として、自らその学説史上の位置づけを試みている。

太田秀通は、今日まで生きている世界史像は、現実の世界の一体化のなかで生まれた近代ヨーロッパの市民意識の生み出したもので、その世界史像は大別して次の三つに分けられるとする⁽²¹⁾。すなわち、(1)普遍的見地に立ち具体的な民族の発展は捨象した時代区分、発展段階論、(2)世界史の発展段階を民族史・地域史の発展段階と関連させつつ、社会構成の前進的な諸時代と捉え、そのなかに普遍的合法則性を見出そうとするマルクスの世界史像、(3)ヨーロッパ世界を一つの歴史的世界と見、ヨーロッパ文明の危機意識のなかでは、世界に存在する複数の文明圏を認める多元的文明圏史観、である。そして、これらの世界史観が戦後の歴史学界の問題意識にどのような影響を与えたかを検証している。

まず、第1段階（1940年代）の問題意識は、(1)に属する社会学的発想と(2)のマルクス主義的発展段階論とが不明確に結合していたこと、また、第2段階（1950年代）の民族問題は、一系発展の理念型的発想とマルクス主義的発展段階論の不明確な癒着を分離させようという役割を担って登場したが、この癒着を正確に捉えることができず、研究者の現実への関心と社会的責任をアピールするものに終わったこと、である。そして、第3段階（1960年代）の問題意識の形成には、(3)の多元的文明圏史観が積極的な役割を果たした。しかし上原専禄に代表されるわが国の文明圏史観は、諸民族の変革主体形成の立場からのもので、弱少民族の誇りにつながる民族史の一貫した歴史像の構成に努力するとともに、ヨーロッパ中心史観をより高い次元で克服しようとする態度からでたもので、その点ヨーロッパの危機意識から発したトインビーらのそれとは異なるが、文明圏がとりわけ宗教の共通性によって設定されたため、構築された世界史像は(3)の文明圏史観に極めて類似したものとなった、としている⁽²²⁾。

太田秀通は、上原専禄が中心となった『高校世界史』（『日本国民の世界史』）の協力者の一人で、当時は、上原の「人類史」と世界史を区別する考えに賛成したが、1960年代の今日、日本国民の危機の分析が、世界史の現段階での全人類を包摂する矛盾の構造を分析することなしには不可能である段階では、人類史の悠久な歩みを展望しようとする意図と、現代日本の生活現実の形成過程と歴史的意味を明らかにしようとする意図とは矛盾するものではないとしている⁽²³⁾。すなわち、階級廃止を旨としての具体的な行動に自分の足で立つ、という世界史構成の原点に立つならば、文明形成以前の、文明形成に向かって歩みつつあった、人間の在り方と、その具体的な苦を、世界史の過程に跡づけるべきであるとして、遠山の時代区分を修正して「原始社会発展過程の時代」を置いた理由を述べている⁽²⁴⁾。

太田秀通は、世界史像の構成についての1950年代から1960年代への問題意識の展開を、歴史的世界を共通性、一体性においてみる文明圏構成から、60年代は歴史的世界を共通性、一体性において見る見方を是認しつつそれを克服して、むしろ民族や文明の織りなす構造的複合体とみなしたものであるとし、このように見るなら、内部矛盾と外部との関連のなかで歴史的特殊性があきらかになり、世界史の基本法則の研究成果を継承し、発展させる可能性があるとした。⁽²⁵⁾

次に、太田は、遠山・太田と共通する問題意識で、東アジア世界に関してアプローチを試みた例として、藤間生大の『東アジア世界の形成』(春秋社・1966)⁽²⁶⁾をとりあげている。そして、それが、従来の文化交流論・文化移動論・文化圏論・国際関係史・外交史を批判した方法での把握を試みながら、実際には、文化や社会や思想の共通性・同一性の量と側面での差異をもとにして歴史的世界の形成を捉えている、と批判している。⁽²⁷⁾

4. おわりに

遠山茂樹によって提唱され、太田秀通によって継承された世界史理論は、世界史を単に民族史の集積とは見ないで、経済発展段階・社会構成体を異にする諸民族相互が、有機的関連をもつ構造的複合体と捉えるものであった。そしてこの方法は、階級抑圧と民族抑圧に集中的に現れる普遍的な人間の苦を、それからの解放を旨としての具体的な場における主体的行動を通じて、自分自身の苦として捉え、階級支配と民族支配をはねのけるための指針とする世界史認識であった。このような方法で、学問と現実の接点に自分を位置づけることができ、世界史像を思想として構築することができるのである。

この構造的複合体論は、上原理論に対置される、マルクス主義史家による最初の世界史構成論であったが、遠山自身もいっているように、上原理論の強い影響下に、上原理論を批判的に摂取したものであった。上原は、世界史を「地域世界の複合的構成体」と捉えるのに対し、遠山・太田は「諸民族の歴史の構造的複合体」としている。また、遠山が、「世界史の問題は、帝国主義的認識をいかにしたら克服できるかという、思想変革の問題を根底にもっている」⁽²⁸⁾と述べ、太田が、「思想としての世界史像」を主張するのも、結局それは、上原専祿の「課題化的認識」を言葉を変えていったようなものであるからである。ただし、1950年代と1960年代では、何を最重要課題とみるかについては違いがあった。上原は「独立の問題」を最重要課題としたが、遠山・太田は「世界平和と民族独立の両立」を最重要課題としたのである。

最後に、世界史理論と世界史叙述の問題がある。上原専祿は課題化的認識を主張し、それに基づいて『世界史講座』や『高校世界史』(『日本国民の世界史』)を書いた。しかし、太田はそれらを文明圏史観に極めて類似したものと批判している。また、藤間生大は構造的複合体論的発想で『東アジア世界の形成』を書いた。しかし太田は、これも「共通性」「同一性」の量と側面での差異をもとにして捉えたものにしかなくと批判している。太田は、世界史を諸民族・諸国家の支配と従属の関係から捉える構造的複合体論を用いて、具体的な世界史の叙述に結実させるためには、多くの研究者の問題意識の共通性を基礎とする原則的研究を積み重ねることが必要であると述べているが、残念ながら、今日までその世界史の叙述は完成に至っていない。構造的複合体論が上原理論をしのぐものであるかどうか、未だ断定し難い。

注

- (1) この間の事情については、有田嘉伸「わが国における『世界史』理論の歴史(2)―科目『世界史』成立期の世界史理論―」(『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第12号, 1989) 参照。
- (2) 有田嘉伸「上原専禄の世界史理論」(社会認識教育学会編『社会科教育の理論』, ぎょうせい・1989) 参照。
- (3) 吉田悟郎『歴史認識と世界史の理論』(勁草書房・1970), 同著『歴史認識と世界史教育』(青木書店・1970), 同著『世界史の小径―世界史学習小論―』(実教出版・1977), 同著『世界史の方法』(青木書店・1983) 参照。
- (4) 遠山茂樹「東アジア歴史像の検討」(『歴史学研究』281, 1963年10月, 幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』, お茶の水書房・1966・所収)。引用は『歴史像再構成の課題』による。
- (5) 遠山茂樹「世界史における地域史の問題」(『歴史学研究』301, 1965年6月, 歴史科学研究会編『民族の問題』, 校倉書房・1970・所収)。引用は『歴史学研究』による。
- (6) 太田秀通「思想としての世界史像」(『歴史評論』200, 1967年4月, 同著『世界史認識の思想と方法』, 青木書店・1978・所収)。引用は『世界史認識の思想と方法』による。
- (7) 戦後の歴史学界の動向については、遠山茂樹著『戦後の歴史学と歴史意識』(岩波書店・1968) や 瀬治著『世界史の意識と理論』(岩波書店・1977) に詳しい。
- (8) 太田, 前掲書, p.149
- (9) 遠山茂樹「世界史把握の視点」(幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』, お茶の水書房・1966), p.3
- (10) 太田, 前掲書, p.151~152
- (11) 遠山「世界史把握の視点」, p.4
- (12) 太田, 前掲書, p.153
- (13) 同, p.157~158
- (14) 同, p.158
- (15) 遠山「世界史における地域史の問題」, p.3
- (16) 同, p.9
- (17) 上原専禄「歴史研究の思想と実践」(『歴史地理教育』102, 1964年11月, 『上原専禄著作集』25, 評論社・1987・p.298)
- (18) 遠山「東アジア歴史像の検討」, p.22
- (19) 太田, 前掲書, p.159
- (20) 同, p.161
- (21) 同, p.162~163
- (22) 同, p.162~166
- (23) 太田秀通の上原批判に対して、土井正興著『世界史の認識と民衆』(吉川弘文館・1976), p.154 や、小谷汪之著『歴史の方法について』(東京大学出版会・1985), p.86~94 は太田を支持しているが、吉田悟郎著『世界史の方法』(青木書店・1983), p.68, 109~110 は上原を支持している。しかし、そこには「人類史」の概念の相違もみられる。
- (24) 太田, 前掲書, p.166~167
- (25) 同, p.167~168
- (26) 藤間生大著『東アジア世界の形成』(春秋社・1966)。なお、藤間はその後、『近代東アジア世界の形成―東アジア世界の形成第2巻―』(春秋社・1977) を出し、その方法論をおし進めている。
- (27) 太田, 前掲書, p.168~171
- (28) 遠山「世界史における地域史の問題」, p.7